

下原・富士見町遺跡出土の「類上ゲ屋型彫器」に関する一考察

鈴木 美保*

THE STUDY ON A CHARACTERISTIC TYPE OF BURIN
FROM SIMOHARA AND FUJIMICHO SITE

Miho SUZUKI*

Abstract

Ageya type burin was firstly derived from Ageya site in Ngano prefecture. After the first report by Morisima, many burins characterized as a similar technological feature has been found from other sites mostly in Kanto region. Simohara and Fujimicho site is located near the Nogawa river. Many Upper Palaeolithic sites are known around that region. 17 burins and 2 blanks of the burin were found by excavation of this site. Those Burins have almost all the same technological features to Ageya type burin, but one feature is different. In this report, I compare the technological feature of these burins with Ageya type burin, and discuss the reason why one feature is different.

はじめに

下原・富士見町遺跡は東京都三鷹市と調布市の市境に位置し、三鷹市側が下原遺跡、調布市側が富士見町遺跡と登録されているため下原・富士見町遺跡と併記されている。武蔵野台地の立川面ではあるが、国分寺崖線に近い野川右岸に位置しており、周辺の立川面上には野水遺跡や野川遺跡が、対岸の国分寺崖線上の武蔵野面には羽根沢台遺跡や東京天文台構内遺跡など著名な遺跡が多数分布している(図1)。

明治大学付属明治高等学校・明治中学校の新校舎建設に伴って、2004~2005年に試掘調査、2005~2007年に本調査が、明治大学校地内遺跡調査団によって行われた。主として近世から近現代、縄文時代、旧石器時代の遺構・遺物を出土したが、中でも旧石器時代は武蔵野台地の標準土層である立川ローム IX 層相当層から III 層上層までに垂直分布のピークを異にする148カ所の石器集中部、

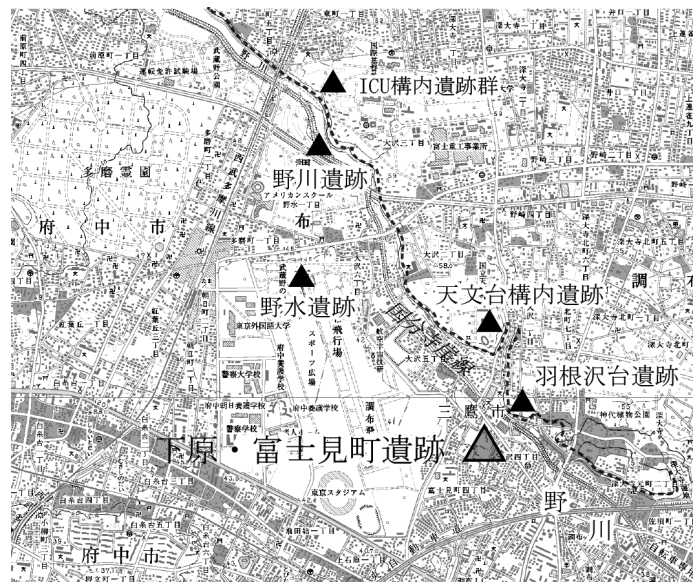


図1 下原・富士見町遺跡と周辺の遺跡
(原図は国土地理院数値地図25000 (地図画像) 東京)

* 東京大学総合研究博物館 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
The University Museum, The University of Tokyo, 7-3-1 Hongo, Bunkyo, Tokyo 113-0033, Japan

306ヵ所の礫群が検出され、約28,000点の石器と約52,000点の礫が出土している。集中部の垂直分布のピークは16枚の垂直区分帯¹⁾に分けられているが、立川ロームⅤ層より下位からの出土点数は全出土点数の1%をわずかに上回る程度で、大部分の石器はⅣ層以上にピークを持つ122ヵ所の石器集中部を中心に出土している〔明治大学校地内調査団編 2016a〕。

筆者は本遺跡の発掘調査、及び整理作業に携わり、報告書をまとめる機会を得たが、出土遺物の中に非常に特徴的な彫器を認め、その存在について言及したが、報告書の中ではその細部まで詳述することができなかった〔鈴木 2015〕。そこで本論では、その彫器について特に技術的な視点からまとめ、その特徴について考察したい。

上ゲ屋型彫器

下原・富士見町遺跡から出土したその特徴的な彫器は、一見「上ゲ屋型彫器（彫刻器）」と言われる彫器によく類似している（図2）。

「上ゲ屋型彫刻器」²⁾は長野市の上ゲ屋遺跡の出土資料を標識として森嶋稔によって最初に提唱された（森嶋 1966, 1973, 1975）。その後90年代になってから、鈴木次郎によって他遺跡の出土資料も含めた体系的な検討が試みられ、技術的な特徴や出土資料の分布範囲が考察され〔鈴木 1996, 2000〕、さらに、橋本勝雄によって網羅的な集積が試みられ、その製作工程や分布範囲について、近年になっても見直しが図られている〔橋本 2010, 2016〕。

下原・富士見町遺跡出土資料は一見上ゲ屋型彫器に類似すると述べたが、どのような特徴が類似し、どのような特徴が異なるのかを明確にするために、ひとまず上ゲ屋型彫器の特徴をまとめておこう。

橋本は森嶋によって最初に示された上ゲ屋型彫器の内容は現在でも基本的には首肯しうるものであるとして、2016年の論考中にも再掲している〔橋本 2016：補註1〕。ここでは、鈴木、橋本による再考も含め概略をまとめる。

- ① 石材：チャートや黄玉石などメノウ質の岩石が多く、多様な石材が使われる。このような特徴を鈴木（1996）は「石材に地域差がほとんど存在しないという特徴がある。」とまとめている。また、遺跡内で製作された痕跡が乏しく、完成品、母型として搬入されていることから、橋本〔2016〕はその背景に「広域石材を基本として、不足分を地域石材で補完する上ゲ屋型の石材需給の在り方」を読み取っている。
- ② 素材：石刃・縦長剥片を素材として用いるものを主体とし、素材石刃・剥片の打面の方向を彫刻刀刃部の方向とするものが多いが、実際の資料には、剥片を素材とするもの、また、打面部分ではなく先端部分を刃部にするもの（約30%）、剥片を横位に用いるもの（約6%）、また両端に刃部を作出するもの（約7%）なども含まれる。
- ③ 製作技術：素材の側縁部に急斜度の調整剥離を施し、左側縁から右方向に横刃（約86%）、または斜刃（約

1) 「垂直区分帯」は下原・富士見町遺跡の調査報告に当たって用いられた独自の用語である。旧石器時代遺跡報告では、重層的に遺物の集中が見られる場合、一般的には「文化層」という用語で分けられる。しかしながら、下原・富士見町遺跡では垂直分布のピークの異なる集中部間において、かなり頻繁な接合関係が見られたために、垂直分布のピークの違いを過去の人間行動と切り離し、あくまでも出土状況における単位として扱うために「垂直区分帯」という用語を適用している〔明治大学校地内遺跡調査団編 2015, 2016a・b〕。

2) 本論で「上ゲ屋型彫器」とした石器は、森嶋〔1966〕は「上ゲ屋型彫刻器」と表記している。橋本は「上ゲ屋型彫刻刀」〔2010〕、あるいは「上ゲ屋型彫刻刀形石器」〔2016〕、鈴木は「上ゲ屋型彫器」としているが、いずれも彫刀面を持つ石器をどのように呼称するかの違いでその内容には差がないと考える。筆者は下原・富士見町遺跡の報告書での分類に従い、本論では「彫器」という用語を用いる。

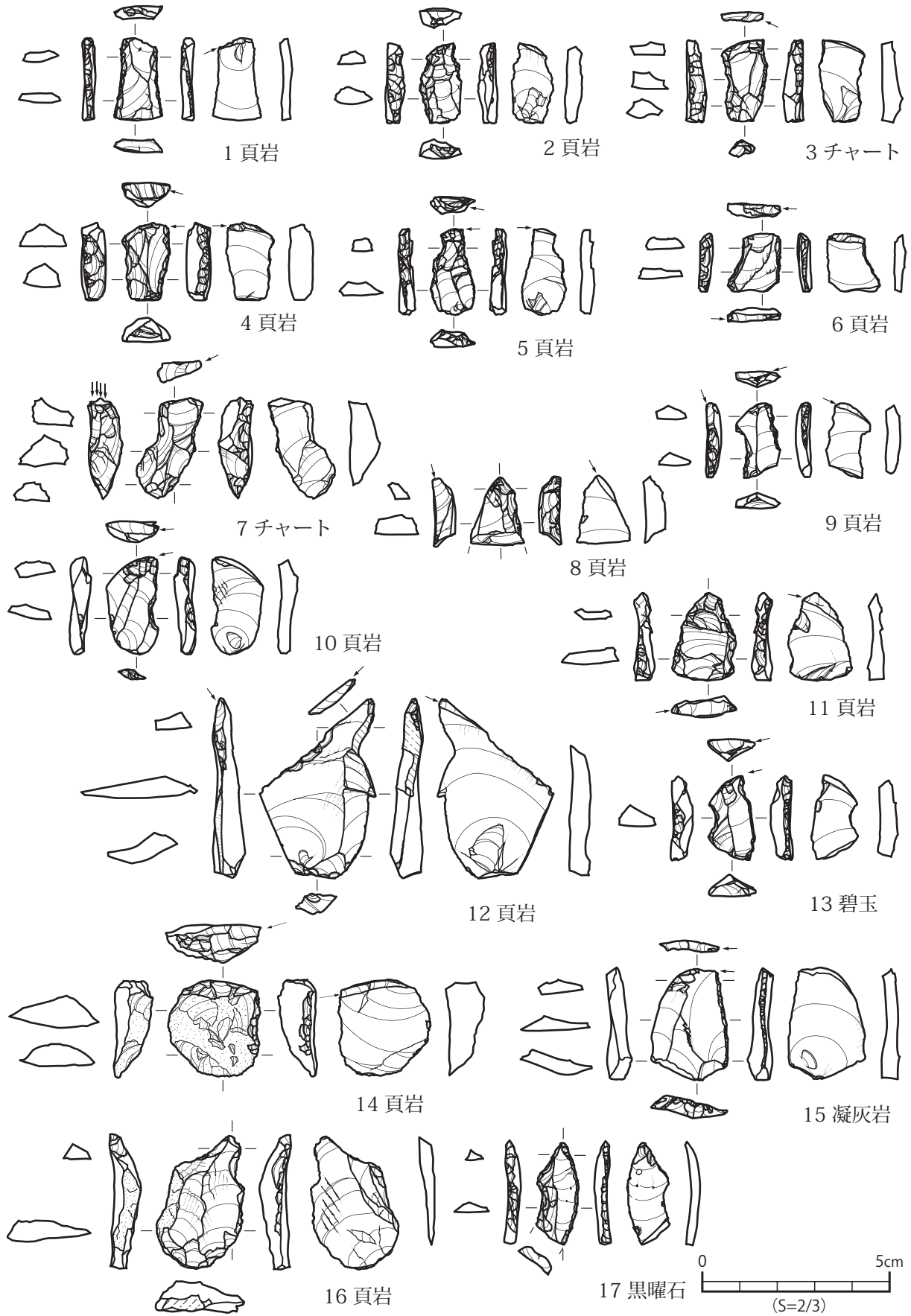


図2 下原・富士見町遺跡出土の類上ゲ屋型彫器

14%)の彫刀面が作出される。彫刀面の長さの平均値はそれぞれ8.0 mmと3.9 mm [橋本 2016]と小さい。調整剥離はナイフ形石器の背部加工と類似した加工で、右側縁部には抉入状の加工が施されることが多い。彫刀面作出後に彫刀面や先端部の形状修正のための調整がさらに施される場合もしばしばみられる。また、彫刀面はしばしば更新され、だんだんと器体の長さを短くしていくため、その大きさは幅に比べて長さの変異が大きい。完形品26点の大きさは、長さ17 mm～42 mm (平均値25 mm)、幅10 mm～28 mm (平均値18 mm)、厚さ4 mm～11 mm (平均値6 mm)、重さ1.1 g～6.9 g (平均値2.9 g)とされている [橋本前掲]。

下原・富士見町遺跡出土の類上ゲ屋型彫器

下原・富士見町遺跡からは合計で17点の「類上ゲ屋型彫器」と2点の母型が出土している(表1, 図2)。技術的な特徴でも触れたように彫刀面作出前の調整加工がナイフ形石器の背部加工に類似していること、しばしば抉入状の加工が施されることが、彫刀面が非常に小さいことなどから、報告書編集前の整理作業の段階での器種分類において、彫刀面を見落とし、ナイフ形石器やスクレイパーあるいは、揉切器に分類されてしまっているものが存在し、報告書編集過程で器種名を修正することができなかつたため、文章中の記載で彫器であることに触れているものも含まれている [明治大学校地内遺跡調査団編 2015]。

表1 下原・富士見町遺跡出土 類上ゲ屋型彫器の属性表

管理番号	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	彫刀面長 (mm)	彫刀面幅 (mm)	器体軸に対する 刃部角度 (°)	彫刀面 位置	出土 集中部	図版 番号
44050247	頁岩 (白滝)	22.0	12.8	3.5	1.0	8.6	1.4	112	末端	1219	1
32001174	頁岩 (白滝)	21.4	11.1	5.2	1.2	6.9	2.3	76	末端	1404	2
24012999	チャート	21.8	12.2	5.5	1.7	5.7	2.5	85	末端	1501	3
24006816	頁岩	20.7	12.7	6.5	2.0	11.8	4.1	77	末端	1502	4
24007288	頁岩	23.0	11.8	4.5	1.1	2.7	1.3	91	末端	1502	5
02002050	頁岩 (白滝)	15.5	14.1	3.8	0.9	9.4/9.5	2.3/2.2	90/90	両端	1502	6
24002403	チャート	26.8	17.7	9.2	3.3	11.3	4.7	80	その他	1502	7
24006518	頁岩 (白滝)	18.1	14.2	6.0	1.5	17.3	4.4	31	末端	1502	8
24007946	頁岩	19.9	11.8	4.1	0.9	10.8	1.9	56	末端	1502	9
24006540	頁岩	26.0	13.8	5.8	1.7	15.0	3.0	61	末端	1502	10
24013152	頁岩 (白滝)	23.4	17.0	5.5	1.8	12.9/16.4	3.2/3.8	56/97	両端	1502	11
24007746	頁岩	47.9	30.9	8.6	6.9	14.9	3.0	52	その他	1502	12
12016424	碧玉	22.4	12.4	5.9	1.5	11.0	3.6	48	末端	1503	13
02002196	頁岩	25.6	24.6	10.4	6.4	14.9	6.2	98	基部	1502	14
21016124	凝灰岩	29.7	20.5	6.8	3.6	17.2	2.1	91	末端	1601	15
02006186	頁岩 (白滝)	35.5	23.4	8.4	5.7				末端	1502	16
02001441	黒曜石	27.1	11.4	4.4	1.1				基部	集中部外	17
24001623	頁岩 (白滝)	20.8	13.1	3.6	0.9	8.1	1.9	81	末端	1306	
24014584	頁岩	24.2	17.2	9.7	3.2	12.8	4.0	103	基部	1306	
平均値		24.4	15.9	6.2	2.4	14.4	3.5	73			

本彫器が出土している石器集中部の垂直区分帯は15を中心に12～16で、おおむね立川ローム層 IV 層中部である。垂直区分帯15 (IV b 層下部) に属する集中部が最も多く、母型を含む19点中の14点が15に属する集中部からの出土で特に集中部1502から11点が出土している。出土集中部の石器群の内容は、すべて、石刃技法を技術基盤とするいわゆる「砂川期」の特徴を持った石器群であるが、共通する特徴として、槌状剥離を有する尖頭器を伴っている。本遺跡の砂川期の集中部には槌状剥離を有する尖頭器を伴わない集中部の方が多いが、それらの集中部からはこの類上ゲ屋型彫器は出土していない。

石材：頁岩が13点、チャート2点、碧玉1点、凝灰岩1点で、母型は頁岩1点、黒曜石1点である。頁岩が大多数を占め、橋本や鈴木と言及している上ゲ屋型彫器の石材の特徴とは若干異なるようにも見えるが、頁岩13点中の7点はいわゆる「白滝頁岩」で在地の頁岩ではなく、残りの6点中、5点は遺跡に剥離の痕跡がある複数母岩ではなく単独母岩である。チャートの1点(図2-7)は左側縁の抉入状の加工を施した調整剥片が接合しているが、剥片剥離の工程を示す接合は見られない。また、1点含まれる碧玉はいわゆる赤玉石で黒曜石も母型に1点みられ、白滝頁岩に偏る傾向はみられるものの、「広域石材を基本として、不足分を地域石材で補完する上ゲ屋型の石材需給の在り方」の特徴に合致しているといえる。

素材：石刃、ないしは縦長剥片を素材としているものが10点、その他の剥片と思われるものが7点、母型ではそれぞれ1点ずつで、石刃、縦長剥片を主体とする上ゲ屋型の特徴と一致するが、彫刀面の位置については、素材剥片の打面部側にあるものが、母型を含め4点で、末端側が13点、両端に彫刀面が作出されている複刃のものが2点と末端側に彫刀面を作出しているものがやや多いと考えられる。ただし、末端側に彫刀面を持つ資料の中には打面部を切断して調整を施し、彫刀面作出の準備をしているようにみられる資料(図2-7, 9, 13など)も見受けられる。

製作技術：側縁部の調整剥離は急斜度、ナイフ形石器の背部加工と類似、抉入状の加工も見られ、調整加工の特徴は上ゲ屋型彫器の特徴と合致する。彫刀面の長さは2.7 mm～17.3 mm(平均14.4 mm)、幅は1.3 mm～6.2 mm(平均値3.5 mm)で、長さは若干長い傾向があるものの、幅は上ゲ屋型とよく一致しているといえる。また、完形品の大きさも長さ15.5 mm～47.9 mm(平均値24.4 mm)、幅11.1 mm～30.9 mm(平均値15.9 mm)、厚さ3.5 mm～10.4 mm(平均値6.2 mm)、重さ0.9 g～6.9 g(平均値2.4 g)といずれもよく一致している(表1)。彫刀面は横刃68%、斜刃32%とやや斜刃が多い傾向があるが、彫刀面作出後、彫刀面や先端部に調整加工がさらに施される特徴も一致している。ただ異なる点は、彫刀面が右側縁を打面として左方向に施されているという点である。下原・富士見町遺跡出土資料17点はすべて、彫刀面が右側縁を打面とし左方向に施されているのである。左側縁を打面として右方向へ彫刀面剥離を施すという特徴は上ゲ屋型彫器の特徴の一つで、鈴木[1996]によれば、右方向の138例に対し、下原・富士見町遺跡出土資料と同じ左方向の例はわずかに3例であるという。

下原・富士見町遺跡出土資料を「類上ゲ屋型彫器」とした理由は、この彫刀面の方向の違いであり、ここまでに見てきたようにそれ以外の特徴のほとんどは上ゲ屋型彫器とよく合致するか、その範疇で解釈できるものである。

考 察

では、このような彫刀面の施される方向の違いをどのように解釈できるであろうか。

石器製作者の視点から考えると、素材剥片に調整剥離を施した後、素材剥片の背面を自分の体の方に向けて左手で保持し、側縁を打面として右手を振り下ろすというごく自然の動作で彫刀面を作出すれば、左側縁を打面として右方向に剥離がのびる。すなわち、上ゲ屋型彫器の彫刀面剥離方向の共通性はごく当たり前の石器製作の結果といえるであろう。言い換えれば、右側縁を打面として、左方向へ彫刀面がのびている下原・富士見町遺跡出土資料製作の動作は、①腹面側を体の方に向けて左手で保持し、結果として右側縁を打面として彫刀面剥離を施すか、②背面側を体の方に向け右手で素材剥片を保持し、左手で彫刀面剥離を施すか、の2つの動作パターンが予測可能であろう。

①の場合、上ゲ屋型彫器がほぼ同じパターンの動作で製作されている状況を考慮すれば、下原・富士見町遺跡出土資料は異なるパターンの動作で製作されている石器として、「上ゲ屋型彫器」とは別の名前を与える方が適切であると評価できるであろう。一方、②の場合は、製作者がたまたま左利きであったという極めて特殊な事例が表出したものであり、それゆえこれら彫器も「上ゲ屋型彫器」の範疇と評価できる。

①であるか②であるかを検証することは極めて困難であることを認めたくえて私見を述べておく。

①であったとすると、今のところ、他の遺跡からは全く出土していないのはなぜであろうかという疑問が生ずる。この製作動作の違いは何に起因しているのだろうか。刃部の方向以外の要素がほとんど同じ石器の用途機能は同じだったのだろうか。だとすれば、この動作の違いは石器製作技術伝統の違いに起因するのだろうか。そうであれば、下原・富士見町遺跡出土資料と同じパターンの石器を出土する他の遺跡が存在するのではないかと考えられるのである。

一方、②であったとすると下原・富士見町遺跡出土資料がすべて同じパターンであるのはなぜであろうかという疑問が生ずる。現代人同様利き手があったとすれば、下原・富士見町遺跡でこれらの石器を製作したヒトたちがすべて左利きであったと考えるよりは、共通の製作技術伝統に基づいて製作した結果すべてが同じ方向の刃部になったという方が合理的に思えるからである。

ここで、下原・富士見町遺跡におけるこの彫器の出土集中部の偏在性について指摘しておきたい。母型を含む19点の石器は垂直区分帯も異なる7カ所の集中部、および、集中部外（母型1点）から出土しているが、大部分の集中部からは1点の出土で、19点中の11点が1502という1つの集中部から集中して出土している。このような出土地点の偏在性を考慮した時、すべて（あるいは大部分）のこの彫器は左利きの一人の製作者によって製作されたのではないだろうかという仮説も考えうるのである。

この仮説を検証するには、この彫器を出土している7カ所の集中部の時間的な同時性を検証したり、さらにこれらの石器に共通するより詳細な癖のようなものを抽出したりする必要があるだろう。それには製作実験なども含め、上ゲ屋型彫器とより詳細な比較分析も必要になるであろう。石器から個人（individuals）を同定する試みは極めて困難であるが〔安斎1990〕、この仮説が検証できれば稀有の例となるかもしれない。ひとまず今後の課題としておきたい。

最後になりましたが、大沼克彦先生からは石器製作をはじめとして、石器研究についての様々なことを学ばせていただきました。特に石器製作を通じて、石器の背後にそれを製作したヒト (Individuals) を感じるという視点は、私の石器研究を何倍も何十倍も楽しいものにしてくれました。先生のこれまでの学恩に深く感謝申し上げますとともに先生の今後益々のご活躍を祈念いたします。

参考文献

安齋正人

1990 「石器は人 (individuals) を語るか」『先史考古学研究』3号, 35-44頁

鈴木次郎

1996 「南関東におけるナイフ形石器文化の彫器 (2)」『神奈川考古』32号, 57-76頁

2000 「ナイフ形石器文化の彫器」大塚初重先生頌寿記念会 (編)『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版, 517-532頁

鈴木美保

2015 「IV まとめ」明治大学校地内遺跡調査団 (編)『下原・富士見町遺跡 III (3) 出土石器』明治大学校地内遺跡調査団調査研究報告7, 明治大学, 590-598頁

橋本勝雄

2010 「上ゲ屋型彫刻刀の技術的特質とその評価」史館同人 (編)『房総の考古学 史館終刊記念』六一書房, 1-21頁

2016 「上ゲ屋型彫刻刀形石器の特質とその背景-上ヶ屋型の再検討」『旧石器考古学』81号, 29-46頁

明治大学校地内遺跡調査団 (編)

2015 『下原・富士見町遺跡 III (3) 出土石器』明治大学校地内遺跡調査団調査研究報告7, 明治大学

2016a 『下原・富士見町遺跡 III (1) 石器群の概要と出土状況』明治大学校地内遺跡調査団調査研究報告5, 明治大学

2016b 『下原・富士見町遺跡 III (2) 石器接合資料とその分布』明治大学校地内遺跡調査団調査研究報告6, 明治大学

森嶋 稔

1966 「上ゲ屋型彫刻器をめぐって」『信濃』18-4号, 259-264頁

1973 「一系文化におけるグレイバー・テクニクの変遷-杉久保系文化の側面-」『信濃』25-4号, 1-13頁

1975 「上ゲ屋遺跡」『日本の旧石器文化2 遺跡と遺物 上』雄山閣出版, 206-220頁